

「やつちやいました」と言つてみたくて

背徳の食卓

岡田有花 文・絵



岡田有花 OKADA, Yuka

1978年、兵庫県生まれ。ネット界を代表するニュース媒体「ITmedia News」記者。京都大学教育学部卒。ITを切り口に、人の心、そして社会の有り様にまで踏み込み、取材される側の信頼を獲得してこそ書ける記事を書き、執筆。公開し続け、ネットメディア界を代表する「デイリーヴァ」となる。また、時に見せる体当たり記事の潔い姿でも名高い。著書『ネットで人生、変わりましたか?』（ソフトバンククリエイティブ、2007年）も刊行している。

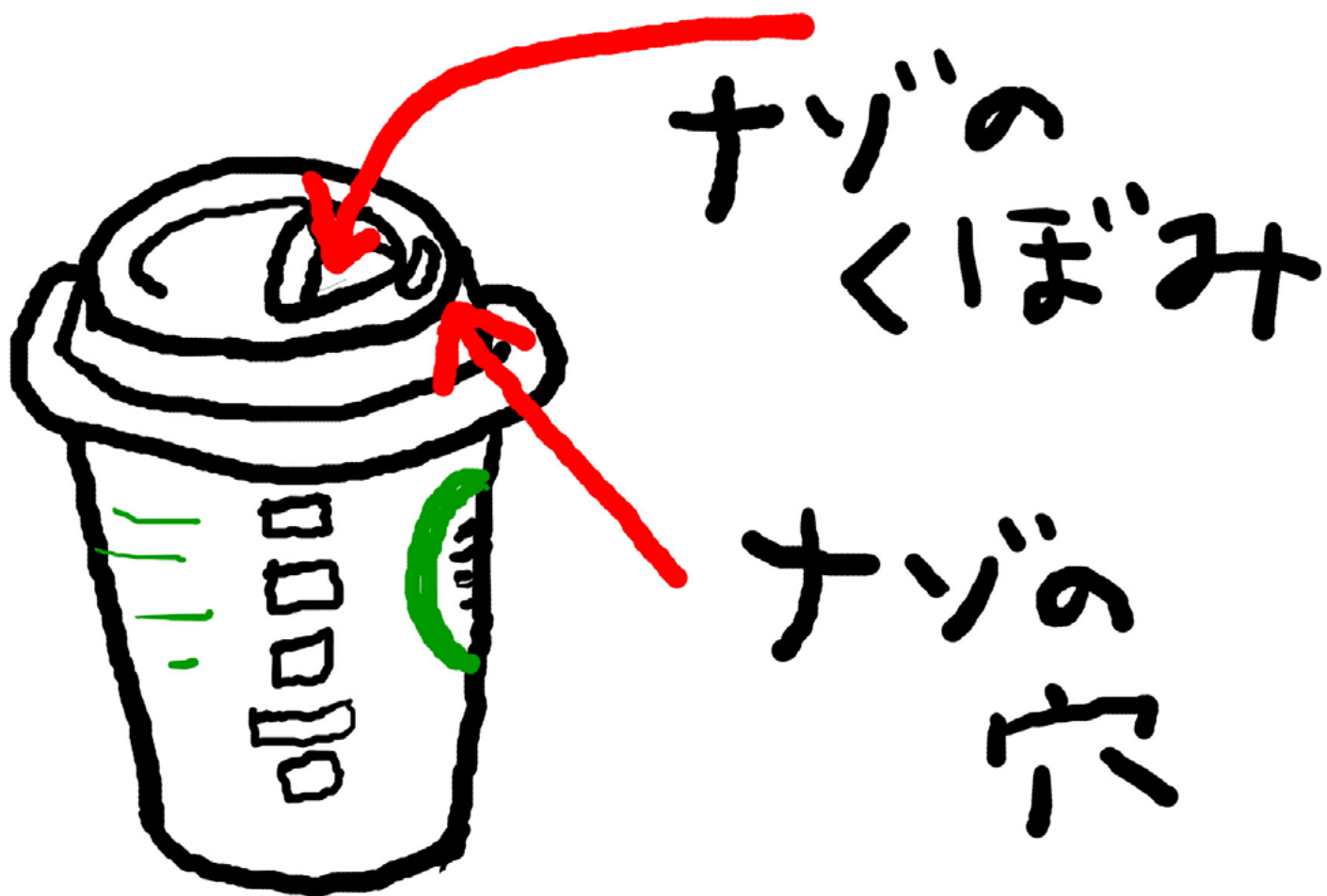
ITmedia News <http://www.itmedia.co.jp/news>

twitter @yukatan

怒られないことを最優先に生きてきた。ルールは破ってはいけないもの。校則は守るもの。中学、高校と6年間女子校に通い、制服のスカート丈は常にひざ下。男女交際は異世界のできごと。化粧にも手を出さなかった。

31歳になった今、Tシャツとジーンズで働く人も珍しくないネット業界で、スーツを着込んで働いている。化粧の仕方が分からないのでほぼノーメイクだが、「ノーメイクなど身だしなみがなっていない」と思われたらどうしようと内心ビクビクしている。ただ無難にまじめに、怒られないように生きている。

三十路独身、東京で1人暮らし。この年になれば、縛られるルールも少ないし、怒ってくれる人もそうそういないから、実際のところ、何をやっても怒られることはまずない。でも、怒られそうなことを思いつくとドキドキする。「こんなことやって、いいのかな」。誰も怒らないのに緊張する。小さなルール違反を、自分で見咎めてニヤニヤする。



スターバックスのカップでみそ汁を飲む

スターバックスは緊張する。数百回も行っているけど緊張する。

頼むのは決まって、「本日のコーヒー」とか「カフェラテ」とか、メニューの一番最初のほうに載っているもの。コーヒーのミルクを豆乳に変えたり、エスプレットショットを追加したりとメニューをアレンジできるのは知ってるし、やってみたくいけど口に出す勇気が出ない。一番小さいサイズが「ショート」で真ん中が「トール」。なんでSやMじゃないのか。かつこよすぎて言いにくいじゃないか。

初めてスターバックスと出会ったのは10年ほど前、大学生のころだ。内気なオタクを隠しながら、無理して社交的に振舞っていたころ。大学デビューを果たしたと信じていた。ダサイ京大生と思われたくなくて、何でも知っているふりをしていた。

京都市の中心部を東西に横切る三条通りと、南北に流れる鴨川の交点。川端三条と呼ばれるエリアにスタバはあった。晴れた昼下がり。オープンカフェ風に屋外に出された黒い丸テーブル。コーヒーを飲む白人。観光と生活が入り乱れる京都市中心街に、えらく都会的で乾いた欧米空間が開けていた。私が見た、初めてのスタバ。「スタバ」なんて呼び名も、当時はなかった。あったとしても、こっぴどく言えなかった。

私はそのころ、食後の飲み物やケーキセットに必ずミルクティーを付けていた。コーヒーを頼んだことは一度もなかった。銭湯のコーヒー牛乳とグリコのあまーい「カフェオーレ」以外は、苦くておいしくなかった。ただ「話題の店」が気になった。アメリカの有名なコーヒーチェーンができたといううわさを聞いて、出かけたんだと思う。

できたばかりのスタバはとても混んでいた。オープンスペースには外国人がたくさん

いて、店内には日本の観光客や地元のおじさんおばさんもいた。恐る恐る足を踏み入れた。行列に並び、自分の番が来て、メニューを眺めてオーダーする。初来店と悟られないよう、まるで常連であるかのように振る舞おうと頑張った。知らないことを悟られないように。イケてる京大生と思われるように。

頼んだのは「本日のコーヒー」。それ以外のメニューは、「キャラメルマキアート」や「コーヒーフラペチーノ」は、何者だかさっぱり分からなかったし、うまく発音できず聞き返されたりすることが恐い。颯爽とオーダーし、常連であるかのように振舞いたい。そのためには、迷う必要がない、結果の分かりきった無難なメニューを頼むしかなかった。一番小さいサイズは「S」ではなく「ショート」らしいと読み取ったが、自信がなくて小さな声で「一番小さいやつ」と、言った。

コーヒーがやってきた。白いカップに緑のロゴが付いた、こじやれた紙コップに入っている。コップの上部には白いフタがきっちりとはまっていた。フタには不思議なくぼみがあり、小さな楕円形の穴があった。初めて見る形だ。なんだこのくぼみ。なんだこの穴。まあいいや。フタを開けてミルクと砂糖を入れる。

「ためし読み」は、ここまで!

本作品をふくむ「AiR[エア]」正式版のご購入は、以下をご参照ください。

(※iTunesが起動します。定価600円・税込)



「AiR[エア]」iPhone/iPad両対応版(iPhoneに最適化したバージョン)

<http://itunes.apple.com/jp/app/id376758025?mt=8>



「AiR[エア]」HD iPad版(iPadに最適化したバージョン)

<http://itunes.apple.com/jp/app/id376752505?mt=8>

電子書籍「AiR[エア]」公式サイト

<http://electricbook.co.jp/>

●電子書籍「AiR[エア]」正式版概要

巻頭グラフ◎異彩の現代美術家

「横山裕一、豊潤の世界」

小説◎傑作と最先端が融合する!

「デビルマン魔王再誕」永井豪=原作 / 桜坂洋=小説 / 籬譚賊=画

評論◎文理融合の新領域からの提言

「平安デジャブ——抱擁国家、日本の未来」前野隆司(慶應義塾大学大学院SDM研究科教授)

小説◎科学が到達した新たな世界

「魔法」瀬名秀明=文 / むらかわみちお=画

エッセイ◎デジタルでも人はものを食べる

「背徳の食卓～“やっちゃいました”と言ってみたくて～」岡田有花(ITmedia News)=文・絵

ツイート◎電源を落としたら消えてしまう物語

「空から降るツイート」北川悦吏子=文

対談◎歴史学者が虚構から現実を照射

「歴史、政治体制、ロボットアニメ」本郷和人(東京大学史料編纂所准教授)×堀田純司

対談◎出版界の裏の裏まで知り尽くす二人

「電子書籍のすぐ先の未来」佐々木俊尚×幸森軍也(ダイナミックプロダクション)

評論◎電子書籍だから語られる本当

「『電子書籍が儲からない』は嘘である」中村祐介(エヌプラス代表)

エッセイ◎漫画界の鬼才登場!

「IT革命と相撲」カレー沢薫=文・漫画

ノンフィクション◎中年漂流!

「1969 バブル世代に生まれて」堀田純司